第４回コンソーシアム協議会　令和６年２月６日(火)　宮崎県庁７号館　＜中部地区＞	
【出席者】　中部地区の代表（進行）：飽田委員、全体会報告：井上委員、記録：大野委員	
県立みやざき中央支援学校	松田　律子
県立看護大学看護研究・研修センター	川原　瑞代
一般社団法人宮崎県手をつなぐ育成会	井上　あけみ
宮崎市教育委員会生涯学習課	大野　路子
県福祉保健部障がい福祉課	飽田　智洋

【協議の記録】

＜各地区における講座や学習プログラム等の展開方策について＞

○　県立看護大学のように、講座への参加だけでなく、企画から関わるなど、当事者の関わりを増やすための配慮や工夫は必要である。当事者目線は大切である。

○　合理的配慮の提供が当たり前のようになるとよい。事前に情報収集すると対応できる。

○　令和９年度の国スポ障スポに実行委員として関わっている。機運を高めるために、ニュースポーツなど、誰でも気軽に参加できる競技を生涯学習の一環として実施してはどうか。

○　県立看護大学で、障がいのある方が参加する講座を実施するのは初めてだったので、今回は、視覚障がいと聴覚障がいの方を対象に実施した。支援できる人材を雇う人件費は必要である。次回は、例えば、音声ガイド支援で映画の上映など、誰でも参加できるような工夫を考えたい。

○　公民館講座のような常設された講座の必要性を感じる。やっても周知がうまくいかないと意味がない。当事者の方だけでなく、一般の方への周知も工夫が必要である。

○　ひなたのつどいで、米良さんが「障がいのある方と障がいのない方がへだてなく学習する」ことをうまく表現してくれた。紹介した取組などの参考に、新たなところに講座等を広げていくべき。

・　参集とオンラインの併用は、参加しやすいので良かった。

・　コンファレンスは第１回から県教育研修センターで実施している。同じ場所で実施していくことに意味がある。今後は、イベント的な要素も加えてもよいかもしれない。

・　ひなたのつどい当日は、県内の各団体を紹介するブースがあるとよい。ボランティアや当事者等のマッチングにつながる。

・　県内団体紹介に音声がついていなかった。今後は視覚障がい向けも意識し準備してほしい。

○　福祉事業所主催での講座について、過去に本事業を受託した。福祉事業所の業務中だと福祉サービスを提供しているので、この事業の予算は使えないなど、予算の使い方が難しかった。

・　勤務外で土日に開催するなどしたが、職員やスタッフの調整が難しかった。

○　障がいの有無に関わらず参加できる講座を開催した場合、一般の方の参加をどうするか。

・　一般の参加者が多すぎて、ターゲットとしている当事者の参加が得られない可能性もある。

○　令和６年度として計画している宮崎市公民館講座を紹介する。今の時点では計画段階。

・　年齢や性別に関係なく誰でも参加できる講座に、新たに「ALL」というマークを付ける予定。いくつかの講座が該当している。まだ、障がいの有無に関係なく、というところまでに至っていない。県生涯学習課が作ったシンボルマークの手前という意味合いに近い。

・　参加申込時に、合理的配慮について回答する欄を設けている。

・　担当としては、このように一回実施すると、次年度以降の継続は可能だと考えている。

○　福祉事業所の「仕事」として、講座等を実施するのはどうか。

○　一般向けの講座等で、合理的配慮をどう提供するか、どう対応するか。
○　当事者のニーズに合わせた講座を実施するため、当事者のニーズをどのように把握するか。
・　宮崎市の講座申込が参考になる。申込時に合理的配慮について尋ねるとよい。
・　企画段階から当事者が関わることも対応策となる。
○　障がい者向けの講座と、サポーター養成講座（ボランティア養成）をコラボして実施するために、県ボランティアセンターに協力を依頼することも考えられる。
○　公民館講座を自主グループにつなげるためには、県内団体等との連携が不可欠である。
・　サポーター活用には予算が必要で、そのためのボランティア養成も必要である。支援者と当事者をつなぐコーディネートや、ボランティアを養成するための存在があってもよい。

第４回コンソーシアム協議会　令和６年２月６日(火)　宮崎県庁７号館　＜南部地区＞

【出席者】　南部地区の代表（進行）：川口委員、全体会報告：桒畑委員、記録：岡村委員

県立都城きりしま支援学校	黒木　光博
南九州大学人間発達学部子ども教育学科	若宮　邦彦
都城市障がい者(児)基幹相談支援センター	岡村　詩織
県立特別支援学校ＰＴＡ連絡協議会	永迫　美紀
都城市障がい者自立支援協議会	川口　貴博
特定非営利活動法人　宮崎県精神福祉連合会	桒畑　貴志
都城市教育委員会生涯学習課	上原　里奈

【協議の記録】

＜各地区における講座や学習プログラム等の展開方策について＞

○　知的障がいの方にも分かりやすい講座の説明（案内）があると参加しやすい。
・　漢字にルビがついていること、わかりやすく表現することは、講座のチラシなどに必要。
・　保護者や当事者本人が見通しを持つように説明すると、参加につながると思われる。
○　主催者からすると、施設の理解や協力がとてもありがたい。
○　今年のフットパス体験会では、地域ボランティアや学生にたくさんサポートしてもらった。
・　ウォーキングと調理体験、それぞれの活動がボランティアの支援もあり充実していた。
○　若い力の継続のために、学生ボランティアをもっと増やしたい。中学生、高校生、大学生。
○　このような体験をとおして、参加した当事者と地域をつないでいけるとよいと思う。
○　講座の案内等について、メディアを使った広報・周知を行う。
○　話合いなども含め、年間で計画を立てておくと、関わりやすいと感じた。
・　チラシ配布などは、２か月前から情報提供（事前説明等）があると理解や協力を得やすい。
○　当事者を企画運営に加えてみてはどうか。
・　情報保障や合理的配慮について。当事者の声が一番大事。
・　支援学校の生徒や当事者の方にも役割をもって参加してもらうことで、改善点など声が聞こえるかもしれない。
○　ボランティアには、事前指導が必要だと感じた。活動の意義などをしっかり伝える。
○　学校や施設、事業所、団体等をとおして、イベント等を周知することも大切。
○　参加者が多いと見守りなど安全の課題があり、主催者として人数設定が難しいと感じた。

○　都城市障害者自立支援協議会の相談支援部会では、余暇支援として、来年度は婚活イベントを計画している。
○　フットパス体験会は、今後、三股町で開催する場合も、関係者の協力は得られると思う。
○　今後、コンソーシアム連携協議会に代わる仕組みや話合いの場をどうするか。
・　市生涯学習課に事務局を担ってもらい、会が発足するとよい。

第４回コンソーシアム協議会　令和６年２月６日(火)　宮崎県庁７号館　＜北部地区＞

【出席者】　北部地区の代表（進行）：髙藤委員、全体会報告：木村委員、記録：内勢委員

県立延岡しろやま支援学校職員	髙藤　優紀
日向市地域福祉コーディネーター連絡会	成合　進也
旭化成アビリティ延岡営業所 オフィスサービス課	木村　進二
のべおか障がい者就業・生活支援センター	塩見　享之
一般社団法人宮崎県作業療法士会	内勢　美絵子
延岡市教育委員会社会教育課	飯野　小巻

【協議の記録】

＜次年度の公民館モデル事業について＞

○　興味を引きそうな講座を実施し、どの講座においても多数の申込みがあった。
○　今後は福祉事業所等の施設単位で参加したいが、募集定員を埋めてしまう可能性がある。
○　福祉事業所などまとまった参加があると、合理的配慮がボランティアなどと共有しやすい。
○　移動手段が無く、行きたいけど参加できない方もいる。どう展開していくか。
○　申込みについて、コンソーシアム委員の皆さんが直接声をかけたのが大きい。申込みが少なかった場合の心配をする必要が無かった。
○　広報をどうするか。前回と同じ参加者がいた。仕掛けやシステムを考える必要がある。
○　講座自体を福祉事業所等で行うのはどうか。他の福祉事業所やサービス事業所の利用者などとつながるきっかけとなる。また、共生社会づくりのために、地域に案内してはどうか。
○　どこをターゲットにするか。福祉事業所等で参加できない人もいる。
○　高齢者など幅広く捉えると、福祉事業所等で実施することも一案となる。
・　福祉事業所等としては、平日開催がよい。事業所職員も参加しやすく、地域貢献できる。

＜次年度も実施すべき内容や取組について＞

○　延岡市社会教育課が実施した３回目の振り返りから。
・　参加者は若い方が多かった。夕刊デイリーを見て応募した高齢者もいる。
○　特別支援学校の保護者から「運動系があってよかった。」という意見があった。
○　ものづくり講座は準備が大変だったが、活動が充実していたのでよかった。
○　年間を通して実施するプログラムは、本人の生涯学習につながるので、「社会教育」の側面で考えると必要だと感じる。単発の講座は、多くの人に知ってもらうことを大切にする。
○　特別支援学校卒業生が講師となった講座も実施できた。今後の励みになったと思われる。
○　今年度、県北で実施した学校と社会教育施設が連携した取組を、今後ステップアップしていくのか。それとも、今回の内容をより充実させるのか。そこを設定したら価値が高まる。
○　今回参加した当事者などは、これまで一般の講座などに参加できなかった人かどうか。今回の講座は、参加者の「学び」につながったと思われる。今後、更なる広がりも想定できる。
○　卒業後の社会参加へのきっかけづくりであり、社会の環境側が、間口を広げる必要がある。

○　卒業後の学びの充実につながった取組だと思う。
○　今回の参加者に、会場の特別支援学校卒業生がいて、久しぶりに学校を訪れる機会となった。
○　講座をとおして、自分を表現していい、参加していいという印象を与えられたと思う。
○　同世代の参加者の中で、障がいが無い参加者が何を学んだかが大事だと思う。また、講師の先生方が今回の経験をどう学んだかが、今後の広がりには欠かせない。

＜この事業を、他の市町村にどのように広げていくべきか。＞

○　今回、日向市から参加した職員がどう感じたかが大切。この協議会の内容を共有すべき。
○　日向市や門川町から参加した卒業生から、なぜ延岡で実施しているか問合せがあった。
○　市町村での実施は、熱意や必要感によるところが大きい。そう考えると、延岡市の熱意は高く、特別支援学校との連携も含め、複数のプログラムが実施できたことはとても素晴らしい。
○　担当者の異動などもあり、何から始めればよいか分からないなども考えられる。

＜国の予算が無くても実施できる方策について＞

○　今回は入門講座なのでは無料とした。当事者は割引にするなど、全員が無料でなくてもよい。
○　今後は、自立支援協議会の方に参加していただいて、生涯学習の活用について知ってもらう。そして、連携体制を広げることが必要だと思う。
○　この取組は、「余暇の充実」につながる。公民館館長がキーマンになることもあり得る。
○　参加料無料が多い市主催の講座から、さらに学びを深める方向けの、会費が必要な自主サークル活動に展開することがあるが、有料になると参加が減ることも多々ある。
○　児童生徒向けの講座については、就労支援など予算が充てられるものもある。
○　福祉サービスはすべて無料ではない。内容によって受講料を払い学ぶ意欲がある方もいる。
○　延岡市の講師謝金は１回 6,500 円と決まっている。民間の講座などと比べると少額であるが、講師バンクの方々には理解してもらっている。
○　フラワーアレンジメント講座は、１名 2,200 円の経費となった。
　・　この価値をどう捉えるか。内容をどうエ夫するか。
　・　生花店の団体が予算を持っている（助成金）。地域福祉の助成金なども考えられる。
○　特別支援学校体育館の使用料は、本来、１時間 500 円である。
　・　今回は、本校卒業生の利用があるので、卒業生の行事として無料となった。
　・　地域福祉の助成金として実施することも可能で、減免対象と考えられる。
○　特別支援教育に係る特別な配慮について問われると、「やっぱり難しい」と構えてしまう。
　・　導尿などには、多機能トイレやベッドやオスメイト設備が必要である。今回は対応できた。
　・　特別支援学校での実施は、ボランティアとして職員の協力を得られたのでよかった。
　・　既存の社会教育施設は施設設備が古く、ハード整備で難しい課題がある。特別支援学校を会場として使用できたことは、主催側としてとてもありがたかった。
○　合理的配慮などは、すべてを用意しておく必要は無い。参加者によって考えればよい。そのために、募集時など事前に情報を得ることが大切で、そこから検討すればよい。
○　県立看護大学で学生が企画運営に参加した事例は、今後の参考になる。
○　土曜日に授業がある九州保健福祉大学の学生がボランティアとして参加するためには、開催日が土曜日では難しいと思われる。早めに準備すれば、参加を募るなど周知できる。
○　ボランティア育成の部分はまだであるが、少しずつ成長している部分が見られた。
○　講座実施に向けて、ボランティアやスタッフの資質向上研修も必要だと思う。
○　今後は、学校だけでなく、地域の福祉事業所等で実施することも考えていくのはどうか。
○　地域住民や延岡西高校の卒業生などが参加する仕掛けも考えてみてはどうか。